

# 地域で暮らす、地域で支える

## よりあいつうしん

### 17号

発行元

宅老所よりあいつうしん課  
〒814-0104  
福岡市城南区別府7丁目  
9-22  
☎092-845-0707

### 花火大会の日に出会った・・・

### 地域で暮らす、おばあちゃんとのほなし

1 ある日のことです。私と、もう一人の職員は、亡くなったお年寄りの通夜を終え、よりあいの森に車を走らせていました。よりあいの森まであと少し。最後の角を曲がった所に、お婆ちゃんが立っていました。電信柱にもたれかかりながら、柱にある表示を必死に覗き込んでいたのです。

「お婆ちゃん、どうされましたか」。お婆ちゃんは、少し驚いた後に、落ち着いた声で言いました。「家に居たら、花火の音が聞こえてね。ドンドンドンって男の人が入ってきたような気がして、怖くなって飛び出してきたの。そしたら、自分の家がわからなくなってねえ」。

その日は、近くで花火大会が催されていました。お婆ちゃんは、自宅に帰ろうと、電信柱にある番地を、一生懸命確認していたのです。とりあえず、よりあいの森に来てもらおう。そこからどうするか考えよう。

お婆ちゃんは、服の上からでもはつきりとわかる程、汗をかいていました。よりあいの森に着いてから、お婆ちゃんに、お茶を出し、できるだけ涼んでもらいました。お婆ちゃんは小柄で、伸びた髪を、おしゃれなスカーフでひとまとめにしていました。

少し落ち着いてから、お婆ちゃんのことを色々教えてもらいました。住んでいる所、家族、生まれた場所など・・・。「私はおしゃべりだからねえ」と、時折自分のことを揶揄しながらも、楽しそうに話していました。

会話の中で、担当しているケアマネさんが、知っている方だとわかりました。そこから、利用している事業所とも連絡がつき、無事に帰ることができました。

数週間後、よりあいの森に、お婆ちゃんと、ケアマネさんの姿がありました。この前のお礼をするため・・・では、ありません。晩御飯をご一緒するためです。

あの日の後シニアPの会議で、数週間後にある花火大会の話題になりました。お婆ちゃんが、また怖くなって外に飛び出してしまいかもれない。それならば、その日は、よりあいの森で一緒にご飯を食べましょう、となったのです。

当日も、お婆ちゃんは、おしゃれなスカーフを巻いて来られていました。「お婆ちゃん、あの時の○○です。お元気でしたか」。私が声をかけると、近くにいたケアマネさんが吹き出します。

「お婆ちゃん、○○さんのこと、おじさんって言うんですけど、こんなに若いじゃない」。お婆ちゃんは、目が悪く、声や雰囲気職員のことをおじさんだと思っていたそうです・・・。(職員29歳)

まあ、なにはともあれ、その日は、花火の音を遠くに感じながら、楽しいお食事会となりました。

2025年には団塊の世代が75歳以上となり、医療、介護の需要がさらに増加すると見込まれています。

このために、国は、高齢者に、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを最後まで続けられるよう、「地域包括ケアシステム」の構築を推進しています。

このケアシステムでは、「一体的」や、「連携」という言葉を使って説明されていますが、どこか、その外身ばかりが主張されていて、少し中身がみえづらい制度だと感じています。

ところで、よりあいの森は「老人ホームに入らないで済むための老人ホームをつくる」という事を目標に建てられました。

そもそも、自らすすんで施設に入りたいというお年寄りは、そう多くはないと思います。

なぜならば、お年寄りには、それぞれ、長い間慣れ親しんだ暮らしがあるからです。そこに誰かが介入することは、大きな変化と混乱を生じさせます。時間と空間に敏感な、世間で「認知症」といわれている人ならばなおさらです。

さらに、地域で暮らしているお年寄りの困りごとは、人それぞれ違います。

わたしたちは、そこに重きを置いてきました。お年寄りを、施設のやり方や、システムに当てはめないよう努力してきていたのです。目の前にいるお年寄りに、ただ、必要なことを、必要な時に、必要な分だけ、取り組んできました。そして、その時々、多くの地域の方々も巻き込んできました。

その支援の押し引きのうち、お年寄りの老いは、徐々に深まっていきます。そして、ゆっくりとではあります。施設で過ごすこと、暮らすことを受け入れていくと、今までの支援を通して感じています。

お年寄りの暮らしの場面から、施設までのグラデーションを、その人らしい色彩で移行することに努めています。

大卒で語られるケアシステムではなく、その人らしさを大切にしてきたケアなのです。

よりあいの森は入居施設ですが、これからも、地域のお年寄りの声に耳を傾け、地域とお年寄り、施設をつなぐ拠点でありたいと思っています。

地域には少しの支えがあれば、その暮らしを続けていくことができる人があふれます。お年寄りが大切に暮らしているところを見守り、支えることができる、そんな施設でありたいと思っています。

よりあいの森  
鐘ヶ江 亮一



おばあちゃんのお食事会。和やかな雰囲気の中、遠くには花火の音が聞こえている・・・



（上）地域交流スペース。よりあいの森の1階部分にある。地域の方々の集まりや話し合いの場として開放している。



（下）シニアP。月に1度開催される、福祉専門職有志の会議。それぞれが抱えている問題を話し合い、意見交換をしている。



（下）シニアP。月に1度開催される、福祉専門職有志の会議。それぞれが抱えている問題を話し合い、意見交換をしている。

少しの支えがあれば  
その暮らしを続けることができる

本人の暮らしを中心に、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供できるように、様々な職種が連携をとることが重要視されています。

サロンのごみ。月に1度開催される地域の方々の集まり。右端には、入所しているお年寄りも、お邪魔している。



サロンのごみ。月に1度開催される地域の方々の集まり。右端には、入所しているお年寄りも、お邪魔している。

宅老所よりあいの管理者を務めておりました後藤さんがこの度退職いたしましたので、この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

「お世話になりました」

お年寄りのみなさん、ご家族のみなさん、支援者をはじめ、関係者の方々、十二年半、かわいがっていただき、育てていただき、本当にありがとうございました。いつもすごいパワーに引張られてきました。私にはありません。大学四年生の時、初めてよりあいにいきました。何か居心地がよく、それからボランティアも出来ないのに、ボランティアが楽しくて、楽しくて、たまりませんでした。お年寄りに、本当にかわいがって、振り回され、育ててもらいました。時には怒られ、ケンカをし、振り回され、何度心を乱されたことか。今まで知らなかった自分を発見しました。また支援をする中で、「自分の無知と無力」を知り、それを受け入れることが、きつかったです。

そんな日々の中で、人は最後まで生きることを知りました。そして、穏やかに亡くなることを知りました。人は一人では生きていけない、他者と関わりながら生きていくことを知りました。

よりあいで働けて幸せでした。お年寄りだけではなく、職員も大切にする職場だと思っています。私は就職する時、村瀬さんに言われた言葉がいつも思い出しています。「これからは悩んだり、色々あると思う。そんな時、友達に言っても、何も解決しない。職場の悩みは誰にも解決しないといけない。自分で話づらかったら、先輩がいる。誰かにも聞いて、ちゃんと話さない。」「職場を創るのは、自分たちで。他にありませんが、この辺で、きちんと意見を伝える、聞く。それが新人だろうが、このお年寄りにとって、職場にとって大切なことなら、みんな取り組むことが出来る。一緒に笑い、喜び、熱く意見をぶつけ合い、がむしやりに頑張れる、時には弱音を吐ける、「同志」がいる。そこに、みんなで取り組んできたのだと思います。そして、これからの理由を探すのではなく、「どうしたら出来るのか」ということを探していく。

よりあいで学んだことを大切に、これからも歩んでいきたいと思えます。退職しますが、これからは応援者として、よりあいに関わっていきなさいと思います。今後とも、よろしく願いいたします。まとまりのない文章ですいません。



おつかれさまでした!!

後藤 朱美

### ヨリアイマンガ

「好物」



### 第2宅老所よりあい新・管理者就任

Question

- Q. 新管理者としての意気込みを教えてください。
- A. 自分の可能性を広げるチャンスと思い、頑張ります。
- Q. 第2よりあいをどんな場所にしたいですか？
- A. 人が自然と集まってくるような、そんな場所にしたいです。

# MASAHIRO OGATA



第2宅老所よりあいに通うお年寄りに、緒方さんについてインタビューしてきました。

鐘ヶ江「えー皆さん、こんにちは。今日は緒方さんについて色々聞きにきました。よろしくお願ひします」。

高尾「私たちは、口が悪いからねー。でも、本人がおったら、悪いこともないんも言えんね」。

鐘ヶ江「いえいえ、今日はなんでもおっしゃってください」。

岡部「もー、私たちがなにも気を遣わなくていいからねー、フリーな感じがいい人ですよ」。

鈴木「岡部さんの言う通り。緒方さんだけじゃなくてね。ここにおる人は皆さなにいいますよ」。

鐘ヶ江「ありがとうございます」。

坂田「緒方さんでしょ。私はね・・・好きよ」。

鐘ヶ江「できればその理由も教えてください」。

坂田「だってね、地元が近いもん」。

鐘ヶ江「地元ですか・・・」。

坂田「私が八代で、あの人が天草。もーそれだけ」。

坂田「波長が合うとよ」。

鐘ヶ江「気が合うということですね。高尾さんはどうですか」。

高尾「ちょっと3日くらい時間がほしいね」。

鐘ヶ江「そこをなんとかお願いします」。

高尾「んー。でもね、なんだかんだで私たちがたててくれるとよ」。

鐘ヶ江「あるじゃないですかー。じゃー、褒められたりもされるんですか」。

高尾「褒めてはくれないね」。

鐘ヶ江「あれれ・・・」。

高尾「私の方が彼を、もてあそんであげよーると」。

鐘ヶ江「そーなんですね・・・(タジタジ)」。

鐘ヶ江「それでは最後に、瀬口さんお願いします」。

瀬口「声がでません」。

鐘ヶ江「そこを何とか、絞らだしてお願ひします」。

瀬口「・・・見ての通りです」。

(一同笑い)

以上、第2宅老所よりあいからでした。

### 編集後記

皆さん、大変長らくお待たせいたしました。「つうしん17号」完成です。

前回の「つうしん」を発行後、もっと面白いものを、それこそ、もっと「つうしん」らしいものを作りたい、と考えておりました。そこで、村瀬さんに相談。な、な、なんと、編集用のソフトを購入していただきました。幼少の頃より何事も「形」から入るタイプのため、ソフットが届いてからは、俄然やる気も入り、パソコンに向かっているだけで、スラスラと文章が舞い降りてくるような気がしておりました。(実際にはそんなに上手くはいかず)

そして、今回の「つうしん」では、ソフトを駆使した構成だけではなく、4コマ漫画を掲載したりと、新しいことにも挑戦しております。今後とも、皆さんに楽しんでもらえる「つうしん」を作るべく、「形」だけではなく、「中身」にもしっかりとこだわっていきなさいと思います。何卒、よろしくお願ひ致します。

鐘ヶ江 亮一

～つぶやき～

「忘れる」ことに付き合うのが大変だと思ふことがある。しかし、「忘れる」ことの素晴らしさも知る。自分たちは「忘れられない」記憶に振り回されることが多いから・・・よって「老い」の世界の楽しさを知る。みんな「忘れる」ことを楽しみたい。